

【前提説明】加曾利 E 式土器の細分になぜ混乱が生じたのか？

大村 裕

加曾利 E 式は現在 4 つに細かく分けられている（各細別はさらに細分される傾向があるが、ここでは触れない）。さて、このシンポジウム予稿集に寄せられた各発表者の原稿の細別表記をよく見ると、ローマ数字で表記されたものとアラビア数字で表記されたものが混在している。しかも細別型式に対する研究者の定義も区々であり、統一が取れていないのが現状である。その原因は、型式設定者の山内清男の認識が後進によって誤って捉えられ、それがさらに新しい世代によって増幅されてしまったことによる。あたかも伝言ゲームのような様相を呈しているのである（スライド 1）。次にこれの実際について解説する。

1924 年に行なわれた東京帝大人類学教室の加曾利貝塚発掘において、E 地点から厚手の土器が出土し、この種類の土器は山内清男によって「加曾利 E」と符牒が付けられた。B 地点では薄手式が出土し、こちらは「加曾利 B」と符牒が付けられた。なお D 地点では E 地点と同じような装飾を持つ厚手の土器が出土したが、体部には磨消縄紋が施されており、少し様相が異なっている。しかしこの時点では E 地点出土土器と D 地点出土土器の関係は分かっていなかった。その数か月後、山内は東北帝大医学部の副手となり、仙台に移ることになる。1927 年 7 月、山内は仙台近傍の大木囲貝塚の層位的発掘に着手し、「陸前」における縄紋前期から中期の編年を構築する。中期後葉に時期を絞ればスライド 2 の通りである。「大木 8」とされた土器は、所謂厚手式（加曾利 E）に並行とされた。山内はこの発掘成果を正式に報告していないのであるが、ここで加曾利貝塚 D 地点の土器と同様磨消縄紋を持つ厚手式を発掘し、大木 8 式よりも後出であることを突き止めたようである。大木 9 式と命名する。この成果を踏まえ、加曾利貝塚 D 地点出土の磨消縄紋を持つ厚手式は「加曾利 E」よりも後出の土器と推定し、「加曾利 E（新）」と命名する。その後 1928 年 9 月には千葉県松戸市上本郷遺跡で伊東信雄らと発掘をし、F 地点 2 号堅穴覆土から「加曾利 E」の土器が出土、その下の堅穴床面の炉からは「加曾利 E」より型式学的に古そうな類似土器を発見する。この層位事例から「加曾利 E」の直前にもう一つの細別型式を加えることになる。かくて加曾利 E 式は 3 つに分けられることになったようである（『画竜点睛』1996：図版 3 参照）。上本郷貝塚 F 地点 2 号堅穴炉体土器に似たものは「大木 8」と仮称した土器群の中にもあったので、大木 8 式は 8a 式と 8b 式に分けられることになる（スライド 3）。中期後葉の大木諸型式の特徴をこのスライドで概観してみよう。口縁に突起があり、口辺を飾る隆線の脇は沈線に画されない土器が大木 8a 式、口縁に突起なく、隆線脇に明確な沈線が沿う土器が大木 8b 式、隆線脇を太い沈線で画し、体部に磨消縄紋を持つ土器が大木 9 式、微隆線を持ち、橋状把手や注口を持つ土器が大木 10 式である。これらに類似する関東地方の中期後葉の土器群に対し、『日本先史土器図譜 第 IX 輯（初出は「9 輯」と表記）』（1940 年）では、「最も古い部分」（大木 8a 並行）、「古い部分」（大木 8b 並行）、「新しい部分」（大木 9 並行）、「最も新しい部分」（大木 10 並行）と表現することになる。細別の数字を示さなかったのは手持ちの層位的事例が貧弱だったからであろう。ちなみに大木 10 式並行の「最も新しい部分」は関東にはまだ良好な事例が見つからなかったのか、以後 1969 年まで沈黙を守っている。ここで問題なのは、1940 年以降、縄紋土器編年表を長く改訂しなかったことで、1937 年 1 月に発表された編年表が戦後も参照されることになったことである。ここでは「加曾利 E」、「加曾利 E（新）」の二細別しか示されていない。さらに困ったことには、加曾利 E 式四細別を示唆した

『日本先史土器図譜 第IX輯』（1940 年）の図版において 4 つの細別のうち 2 つしか提示しなかったことである。すなわち、大木 8a 式並行の「最も古い部分」と大木 9 式並行の「新しい部分」である。

戦後、芹沢長介が『日本考古学講座 3』河出書房（1956 年）において、1937 年に山内が「加曾利 E」「加曾利 E（新）」と示した加曾利 E 式の細別をローマ数字で表記する（スライド 4 の中央参照）。ちなみに、同書の「Ⅲ 各地域の縄文式土器 関東」を執筆した吉田格も同調している（註）。実は、それらの細別は各々更に二つずつに分かれることを山内は 1940 年には記載していたのである。ここで注意して頂きたいのは、芹沢の加曾利 E I（ローマ数字）は山内の大木 8a 式並行の加曾利 E1 式、大木 8b 式並行の加曾利 E2 式を包括したものであったということである。この書籍は当時の考古少年たちの必読書だったと言われているから、ここに収載された編年表は広く参照されたと想像される。ちなみに芹沢が明治大学に所属していた時は、縄紋を専攻する学生の多くは芹沢の指導を受けていたと言われている。後年縄紋文化研究のスター的存在となる岡本勇も、各地の遺跡の発掘に同行して切磋琢磨していたようである。こうした関係から、明治大学では縄紋土器型式の細別をローマ数字表記することが一般的だったのである。

その後、岡本勇は、神奈川県吉井城山貝塚の報告（1963 年）において、芹沢・「加曾利 E II（ローマ数字）式」（磨消縄紋があるので山内編年からすると大木 9 式並行の加曾利 E3 式）のあとに、山内が「加曾利 E 式の新しい部分に伴存する土器」（口頸部文様帯を省略した類型）と記載したもの（予稿集の 10 頁、第 3 図 3～4）を「加曾利 E III 式」としてしまう。さらに、大木 10 式に類似する神奈川県吉井城山遺跡出土の土器（予稿集 11 頁、第 6 図 1 参照）を、岡本は「加曾利 E III 式に続くもの」としたのであった。この「岡本編年」は、1965 年に刊行された『日本の考古学 II 縄文時代』（河出書房新社 1965 年）において再度解説され、巻末の編年表において加曾利 E 式最終末の土器に「加曾利 E IV」の呼称を与えている。すなわち、山内編年と岡本編年において、加曾利 E4（IV）式だけは内容が一致しているものの、他は大きく食い違っているのである。『日本の考古学』（河出書房新社）や横須賀市吉井城山貝塚報告は、われわれ団塊世代前後の多くの学徒がこれをテキストにして勉強していたので、岡本の編年観が広く深く浸透してしまったというわけである。最初の発信者（山内清男）が言ったことを次の受け手が誤って受け取り（芹沢長介）、二番目の受け手（岡本勇）がさらに芹沢の「勘違い」を増幅してしまって、最初の発信者の認識と全く異なる内容が出来上がってしまったのである。まさに考古学史上の「伝言ゲーム」である。

この誤りを正そうとしたのが群馬県在住の能登健（1975）であった。その結論を簡潔に紹介すると、道に迷ったら最初の場所（加曾利 E 式を設定し、4 細分を示唆した山内清男の細別観）にもどろう、と主張するものである。筆者などはこの論文を読んで大きな衝撃を受け、以後考えを改めたが、意外にもそれに対する反発は大きく、「既に岡本編年が学界に浸透しているのだから、今さらそれを改めると混乱が起きる」等々の意見も多数ある。かくて基本的に山内清男の学説に従おうとする研究者はアラビア数字で細別表記をする傾向があり、「岡本編年」に従おうとする研究者はローマ数字で細別表記をする傾向が生まれたのである（ただし研究者によりそれぞれ微妙な温度差がある）。

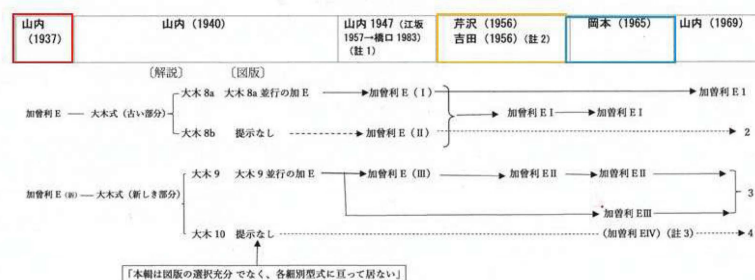
註 予稿集において筆者は、〈吉田（1956）は『日本先史土器図譜』を参照していなかったのではないかと疑念を呈し、参考文献も挙げていないと記したが、後日、早坂廣人氏より「参考文献に記載がある」との注意を受けた。原典に再度当たってみると、「〔加曾利 E 式〕」の参考文献には挙がっていないが、「総合的文獻」の部分には確かに記載されていた。但し刊行開始年も第一期完了年も誤って記載されている。「加曾利 E II 式」「加曾利 E 式（新）」の記載内容も山内のそれとかなり異なっており、「本当に参照したのか」という疑念は未だに拭うことは出来ない。誤りを正してくれた早坂氏に感謝する。

加曾利E式の細分になぜ混乱が生じたのか？

記録集用スライド

1. 考古学史の「伝言ゲーム」

ー型式設定者（山内）の意図を次世代の人たち（芹沢・吉田）が勘違いをし、さらにその後進（岡本）が勘違いを増幅し、これが団塊世代に広まっていった！ー



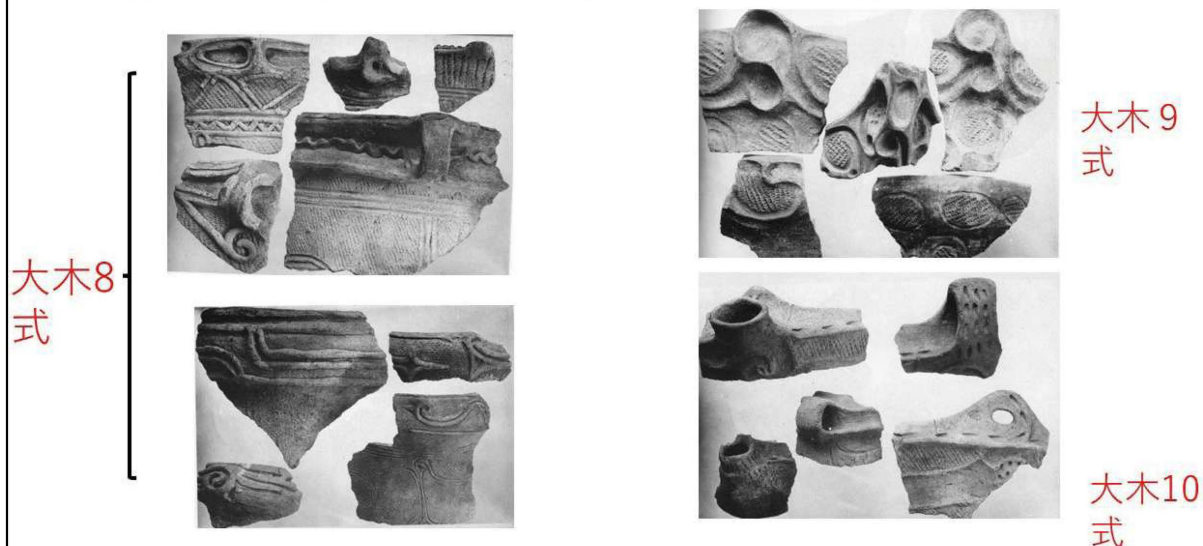
第1図 加曾利E式細別観の変遷図（大まかな概念図）

註1) 「山内 (1947)」は、『原始文化研究会』等で山内が発表したものを江坂 (1957) が『縄文文化編年的研究の変遷』の一覧表に挿入したものという。ただし、江坂作成の内製の表（横口、1983：72頁に転載）には、「加曾利E」の細別にローマ数字は振っていない。「加曾利E→加曾利E→加曾利E」とのみ記載されている。ローマ数字は、編集の過程で挿入された可能性がある。

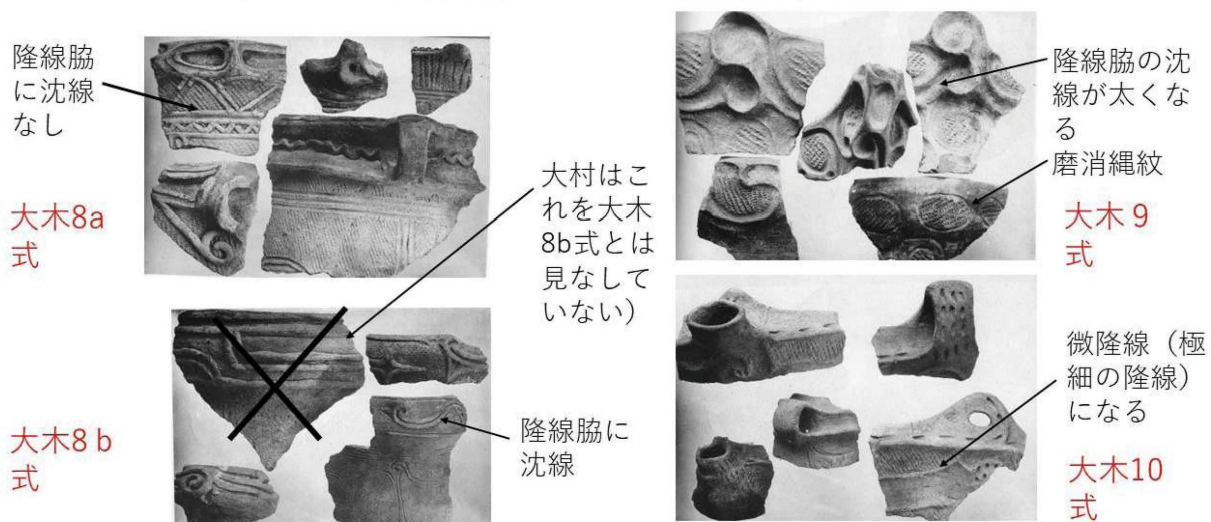
註2) 柳澤 (1986) によれば、細別型式のローマ数字表記は芹沢 (1950 等) が嚆矢という。吉田はこれに倣ったのではないかと柳澤は推定している (107頁)。

註3) 岡本 (1965) の本文には「吉井 (城山) 貝塚では、加曾利 EⅢ式土器の上層」出土の「口辺部文様をほとんど失った土器の一群」に対し、「将来新しい型式とすべきものと思われる」とのみ記載 (117頁 括弧中の語句は大村)。巻末の「縄文式土器編年表」には「加曾利 EⅢ」の直後に「加曾利 EⅣ」が配置されている。

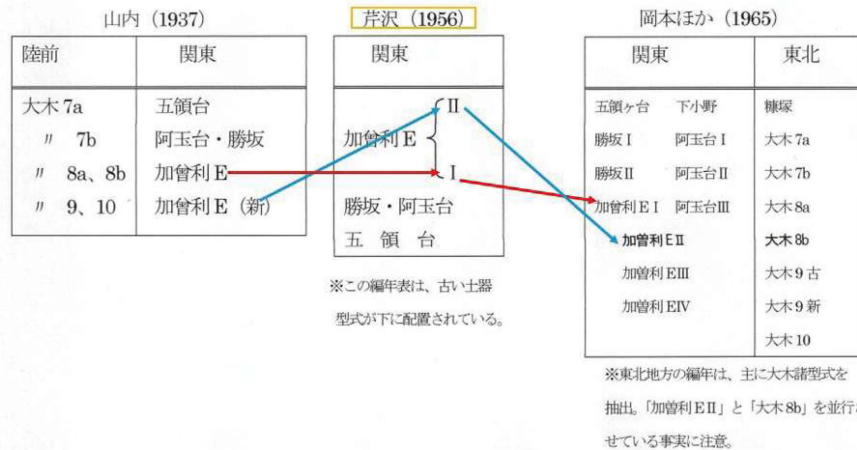
2. 山内（1930）における中期後葉の大木諸型式（写真は中村編、1996より抜粋）



3. 山内（1937）による中期後葉の大木諸型式（写真は中村編、1996より抜粋）



4. 芹沢長介が『日本考古学講座3』（1956）で提示した縄紋土器編年表と他者の表との比較



前提説明③